

# 平安中・後期における都市と権力構造

——天皇・上皇の移徙<sup>わたまし</sup>をめぐる——

佐 古 愛 己

はじめに

古代日本において、天皇はしばしば行幸―すなわち、皇居を出て移動―した。その目的は、民情視察のための地方行幸や遊獵、遊覽目的の行幸、さらには遷都による行幸にいたるまで、実に多岐にわたる。<sup>①</sup>

律令制下の天皇による地方行幸や狩獵が、大和政権下の大王による「ミユキ」や「国見」に由来するところがあったと説かれている通り、天皇が大王権力の継承者としての側面を確認し、天皇と地方の指導者や民衆との服属儀礼の場となり、天皇の統治権の総攬者としての立場を明示する意義が、行幸にはあったのである。

さらに、行列を民衆に示すことで律令天皇の隔絶した権力と權威を知らしめるとともに、橋・道路などの交通設備の敷設、行宮や離宮、官衙寺社建設を促進する効果が認められる点などから、律令制を浸透・活性化させる役割をも有していたとされる。<sup>②</sup>

このように律令天皇にとって、政治的・軍事的・経済的側面において、王権の權威と権力の維持・拡充という重要な意義を、行幸は果たしていたといえよう。

しかしながら、九世紀以降では、僅かな機会を除いて行幸は実施されず、天皇は平安宮内の内裏からほとんど動

かない存在になってしまう。

かかる変化の背景には、天皇が政務から後退し、儀式にのみ現れる存在となり、さらに儀式の場さえ出御しない天皇へと、『不出御』が拡大するという『動かない天皇』への変化があり、それは日常的に政務が太政官以下の官僚機構により処理されていく体制が確立したことが関連していると指摘<sup>(3)</sup>されているように、王権や統治機構の変質などにより、行幸が担っていた当初の目的や意義が、必要とされなくなってきた社会的変化があったと考えられるのである。

ただし限定的になったとはいえ、平安中期以降の天皇も行幸を実施している。律令制下とは異なる行幸の特徴や意義を解明する試みは、該期王権や貴族社会の特質の一端を明らかにすることにつながるというよう。

本稿では、「動かない天皇」となった平安中期以降における天皇が、動く機会として、従来あまり注目されてこなかった、移徙―すなわち天皇が居所（皇居）を移動する家移り―を取り上げて、平安中・後期の王権と移動の問題について検討したい。

具体的には、摂関・院政期と称される時期の、天皇と上皇の移徙事例を網羅的に洗い出し、なぜ頻繁に移徙が実施されたのか、その要因と社会的背景を明らかにし、さらにそれを踏まえて、該期王権や貴族社会における移徙の意義について考察したいと思う。

## 第一章 移徙儀礼の特徴

### （一）平安中期以降の行幸

単なる行幸ではなく、移徙という事例を検討対象として、王権と移動の問題を考えようとする本稿の意図を明らかにするため、はじめに平安中期以降の行幸行列の次第と、移徙作法の特徴について述べておきたい。

平安中期以降では、主として大嘗会御禊・朝覲・神社などの行幸が行われ、それぞれに政治的目的があった。個々の特色や意義については、紙幅の都合により先行研究<sup>(4)</sup>や拙稿<sup>(5)</sup>に譲り、ここでは詳述しないが、これら平安中期以降の行幸行列に関しては、個別の目的とは別に、共通した特徴と意義があった。この点について、まずは確認しておきたい。

天皇の行幸行列は鹵簿<sup>(ろぼ)</sup>と称する。中国唐の皇帝の鹵簿は、前陣に公的、後陣に私的な官や物品が並ぶという構造であった。天皇鹵簿もこれに共通しており、皇帝の鹵簿の形態を参考にして形成されたとされるが、一方で唐皇帝鹵簿の最大の特徴とされる行列周囲を隙間なく固める大規模な儀仗隊が、天皇鹵簿では見えず、僅かに天皇の御輿のまわりに供奉する近衛大将・次将も、行列の前後の間隔が広くあき、観衆との別が付かないほどの位置にいと指摘されており、大きくその構造を異にしていた。

野田有紀子氏によると、「天皇鹵簿には、留守を除く議政官がほぼ全員供奉し、諸司も多数参加、さらには東宮・親王・女官も加わり、いわば朝廷の構成メンバーのほぼ全範囲から形成され」、鹵簿図に供奉者の個人名が書き記されるほどに、行列に供奉すること自体を、天皇・貴族双方が重要視していたという特徴がみられ、「中国では諸司の『物』と『人』が皇帝の尊厳を高めるために不可欠であったのに対し」、「日本では鹵簿・儀式には『物』よりも、『人』自体が供奉することによって、天皇の権威がより高められると見なされた」という。<sup>(6)</sup>

そしてさらに、かかる認識は行列の見物という行為にも及んだ点が注目されている。とりわけ「一条朝後半から院政期にかけて、権力者の見物所に参集して見物する例が増加し、摂関や上皇を頂点とする貴族社会の政治的秩序が路上に及び、行列見物が儀礼的様相をも帯びるようになり」、「行幸見物は天皇への『忠』を示す行為と見なされ、見物者は行幸儀礼に欠かせない存在であると認識された」と指摘<sup>(7)</sup>されている。

また、平安中期以降の行幸は、「動かなく」なり「見えない王」が露出する姿を、平安京の都市民という「観客」

が見物することを意識したパレードとしての意義が強いとする評価もある。

実際、道長や上皇が大規模な棧敷を儲けて見物し、「鹵簿図」を開いて供奉の人々を確認する様子が記録に散見する<sup>⑨</sup>。さらに道長は、行列への不供奉者は「明春除目不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>申文<sub>一</sub>」と譴責し、棧敷で見物している上皇が諸司の見参を奉るように命じ、「供奉諸司整<sub>二</sub>行列<sub>一</sub>過<sub>二</sub>門前<sub>一</sub>間、衆人失<sub>レ</sub>色<sup>⑩</sup>」したとあり、時の権力者たちが行幸供奉を厳しく監督していたと解される。そして行幸のみならず、都で行われる様々な祭礼などの行列に対しても棧敷での見物が盛んに行われていた<sup>⑪</sup>。

以上のように、平安中・後期において、王権構成者を主体とする行列への供奉や見物が、天皇への忠を示すとともに、摂関や上皇への奉仕の一環にもなっていたことをうかがわせ、政治的に重要視されたと理解できよう。

## (二) 移徙儀礼の特徴

本稿で取り上げる移徙は、通常の行幸と如何なる違いがあったのだろうか。移徙とは住居を移動し他家に渡ること。つまり、貴人の転居を敬つていう語である。単に、主人が旧宅から新宅へ身を移すだけではなく、決まった作法に従つて実行された。小坂眞二氏の研究によつて、天皇の移徙次第をまとめると(表1)のようになる。

表の通り、移徙儀礼は旧宅から新宅へ、水・火・土(黄牛)と電神等を移すことを主目的とし、吉書、饗宴、打攤などが三日間行われる行事であつた。そして全体的にみて陰陽師の関与が強い儀式でもある。この儀を経て、はじめて新宅は主人の居所―天皇の場合は皇居―として位置づけられたのである。

移徙の重要な特徴として、新居への移動が戌もしくは亥刻に行われる点があげられる。つまり、通常の行幸が多くの見物者の中を行列したのとは異なり、「電神」などを移すこの移動は、夜陰に紛れて行うものであつた。ゆえに、前述のような「見物」の政治的效果が期待された行幸や祭礼行列が果たす役割を、この移動は必ずしも有して

「表」 天皇の移徙次第

①陰陽寮が作成する日時勘文に随い、大殿祭（神祇祭祀）、読経・安鎮法（仏教儀礼）、宅鎮祭（陰陽道儀礼）を行い新宅となる皇居を鎮謝。移徙当日の早旦、宅鎮祭の鎮符を新皇居に安置。

②旧宅の儀…戌・亥刻頃実施。

天皇出御。天皇が旧宅（皇居）を出立する際、反問を行う（院政期以降は上皇も同様）。

※反問（へんばい）とは、貴人の入出御に際して邪氣を払うために行う呪法で、陰陽道で禹歩（うは・うふ）と印呪などの一連の作法からなる邪氣を払う呪法。

③陰陽師による新宅散供…

大門（内裏では建礼門）、中門（承明門）、堂前（紫宸殿前庭）、堂上（紫宸殿・清涼殿）に、五穀・酒等を散ず。

④椶水と脂燭を各々持った童女二人と、黄牛二頭を牽く童女二人（左右馬寮官人供奉）が中門外で列立。

⑤大門外で神祇官大麻が奉獻され、天皇は大麻で軀を撫でる。

⑥大門呪（大門から入御の際の反問…一二世紀初頭頃、安部吉平より始まるか）。中門呪（中門外から前庭に入御の際の反問）。

⑦前庭の儀…

水・火・黄牛・陰陽頭・輿の順で堂前まで歩行。

⑧堂前呪…

堂上に昇る前に行う反問（一二世紀初頭頃成立カ）。

⑨堂上呪…

紫宸殿・清涼殿で行う反問（天皇が陰陽師の後を追歩。上皇は後白河院政期からの新儀カ）。

⑩黄牛…三日前庭の便所に繋ぐ。

⑪水…夜御殿の御帳傍に三日間置き、四日目に御厨子所に給わる。

火…夜御殿四方灯（御殿油）に付け、三日間消さず、四日目に内膳司に給わる。

二日目の早旦、この水火で五穀を炊き、諸神を祀る。

⑫殿上の儀…

五菓（一部を残し、四日目に生氣方に埋める）を供し、次に饗宴が行われ、打攤が行われ、三日間続く。吉書が奏せられる。供奉の公卿や諸司も三日間宿直する。

⑬（その後吉日を選んで）内侍所（神鏡）・内膳三竈神が新宅に移される。

いたとは言えないのである。

それでは移徙には如何なる意義があつたのだろうか。權威と権力の中核たる天皇や上皇の所在、なかでもその居所が変更される移徙なる行為が頻繁に実施される状況は、当該期の政治や社会構造の変化と密接に連関する現象であると推察される。

しかし、移徙に関しては、これまで陰陽道研究で言及されるにとどまり、その政治的な意義は未解明のままである。そして、かくも頻頻な移徙が何故に必要とされたのかという問題に関しては、内裏の焼亡や方違えなどの影響が指摘されているものの、その理由は必ずしも明確になっていないのである。具体的な事例検討を通じ、以下に考えていきたい。

## 第二章 天皇の移徙にみる特徴

(一) 平安中期―九六〇年以降の摂関期を中心に―

延暦一三年（七九四）に桓武天皇が平安京へ遷都して以来、長らく天皇が移徙することはなかった。つまり、天皇の居所は大内裏（平安宮）内の内裏であり続けたが、それに変化が生じたのは、遷都後一六六年目にして初めて起きた内裏火災に際してである。

天徳四年（九六〇）九月、初めて内裏が焼亡すると、村上天皇は一旦大内裏内の別の建物へ避難し、その後、後院―天皇讓位後に遷御すべき御所として造営された、本宮Ⅱ内裏以外の御所―である冷泉院へ移徙した。<sup>14)</sup>

以来、内裏はたびたび火災に見舞われた。貞元元年（九七六）五月再び炎上の際、円融天皇は職曹司に一時的に難を逃れたのち、太政大臣藤原兼通の堀河第に遷御した。<sup>15)</sup>

このように火災時に京中の後院や貴族の邸宅を仮皇居として利用したものを一般に里内裏という。

以下、本稿では大内裏内の内裏を「内裏」、それ以外の天皇の居所を「里内裏」、「内裏」と「里内裏」とを区別せずに単に天皇の居所全般を指し示す場合を「皇居」と記載することとする。

寛弘六年（一〇〇九）一〇月五日、一条天皇の里内裏一条院が焼亡した際、天皇はまず織部司に遷御、一九日に道長の枇杷殿に移った。<sup>(16)</sup>この邸宅は「不日造作雖未了、九重作様頗写得」<sup>(17)</sup>たりといわれ、里内裏が内裏に模して造作されていた実状を示している。

長和三年（一〇一四）二月の内裏焼亡では、三条天皇が藤原道長の枇杷殿を里内裏としたが、「還宮事被談云、有<sub>二</sub>于還御之本意<sub>一</sub>。此枇杷第御坐間不<sub>レ</sub>宜。又有<sub>二</sub>不吉夢想之由有<sub>二</sub>仰事<sub>一</sub>。縦雖無<sub>二</sub>此仰<sub>一</sub>、私領処久御坐、既非無<sub>二</sub>事恐<sub>一</sub>。仍至<sub>レ</sub>今奉<sub>レ</sub>渡之思昨今尤切」<sup>(18)</sup>なりとみえる。すなわち、道長は天皇から「枇杷第に滞在するのは宜しくない。不吉夢想がある」との仰せを受け、彼自身も、「私領に久しく天皇を留め奉るのは恐れ有り」との想いを実資に語っている。

かかる発言は、内裏こそが天皇の居所であるという「常識」が、貴族社会において根強く存在していた事実を反映したものと考えられる。

そこで、摂関期における天皇の移徙事例を博搜して、事由を分析してみると、①皇居焼亡関連三五件、②怪異一件、③不明一件となり、移徙要因の大半が内裏焼亡に限定されていた事実が明らかとなった。<sup>(19)</sup>この点からも、内裏現存時はこれを皇居とすべきであり、焼失の場合でも再建後は直ちに内裏に戻るべきだと強く認識されていたことがうかがえる。

それでは、寛弘七年（一〇一〇）十一月二八日と、長和五年（一〇一六）五月二日に行われた移徙を例に挙げて、移徙儀礼の内容を今少し検討しよう。

まず、寛弘七年の例は、前年一〇月に一条院が焼亡したため、道長の枇杷殿を里内裏としていた一条天皇が、新

たに再建された一条院へ遷御したものである。『御堂関白記』によると、まず饗が行われ、上達部・殿上人には大樹、供奉の諸司・諸衛・所々官人や采女・所々の女官らに足絹が、舍人以下・下女らに手作布などが下賜され、蒔絵の宮に入れた刷本注文選・同文集が天皇に献上された。続いて藤原教通や尚侍ら男女一〇人に対して勸賞叙位が行われたのち、天皇以下、諸卿、諸司・諸衛、女官らが一条院へ遷御し、天皇と公卿・殿上人らによる饗宴や打攤が行われている<sup>20</sup>。

次に、長和五年は、内裏が前年十一月に焼亡したため、翌年六月に新造された一条院へ、後一条天皇が遷御した例である。なお天皇は同年正月に九歳で即位したが、それ以来、外祖父である摂政藤原道長の邸宅京極院を里内裏としていた。

当日の様子を詳細に見ていくと、前掲小坂氏の一覧とほぼ同様の次第で進められているのがわかるが、『小右記』には旧宅となる京極院における饗宴と賜禄、勸賞の様子が詳しく記されている。これによると、内大臣頼通以下が御前にて饗宴を行い、その後、御前における一〇疋の駒引、箏・和琴・琵琶の献上、諸卿以下侍臣への女装束の賜禄、諸卿・女官への饗禄が摂政の儲けにて行われている。またその間に、京極院の本の家主である源雅信の孫や、現在の家主左大臣道長の家司ら、男女計八名への勸賞叙位が実施され、戌二点に新居へ遷御したとみえる<sup>21</sup>。

如上、移徙においては公卿・殿上人をはじめ諸司・諸衛、女官、舍人以下・下女に至る多くの貴族官人らが参仕し、天皇への奉仕を通じて忠誠を示すとともに、旧宅となる里内裏では、その邸宅の主人―当該期は大多数が摂関―が、その儲けにて饗宴と参仕の人々への賜禄を行い、天皇への献上の品を用意していたことがわかった。また、天皇は還御に先立ち、褒賞として、家主の子・孫や家司らに叙位を実施するのを通例とした。このように、移徙は多くの貴族官人らが天皇に奉仕する場であるとともに、里内裏となる邸宅の提供者である摂関とその家族、関係者が卓越した立場にあることを明示する機会になっていたと理解できよう。



(二) 平安後期―白河・鳥羽・後白河院政期を中心に―

院政期になると、内裏こそが天皇の居所であるという「常識」は大きく変化し、橋本義彦氏が指摘されている通り、内裏現存時でも里内裏を日常の皇居とするようになる。<sup>(22)</sup> その要因を考える上で注目したいのが、次に掲げる白河法皇の発言である。

天永三年（一一一二）五月一三日、当時僅か一〇歳の鳥羽天皇が皇居としていた高陽院が焼亡した。難を逃れるために、天皇は即時白河法皇御所であつた小六条殿に移つた。<sup>(23)</sup> その二日後、当時法皇の御座所であつた「頭弁実行朝臣宅」に摂政、内大臣以下の公卿が参集し、「以何処可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>皇居<sub>一</sub>哉」との法皇からの下問について議定した。「近日内裏已在。早遷御可<sub>レ</sub>宜歟」との多数意見が法皇に伝えられたところ、法皇は「定申之旨尤可<sub>レ</sub>然。但内裏殿舍甚廣博。幼主御座之条可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>思歟<sub>一</sub>。殿上諸陣常以無<sub>レ</sub>人也。仍頗可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其恐歟<sub>一</sub>。被<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>新里亭<sub>一</sub>早渡御如何」との見解を述べたのである。<sup>(24)</sup> 結果、諸卿は新皇居造営場所の選定について議定をはじめ、一〇月に里内裏大炊殿が新造された。<sup>(25)</sup>

ここで留意しておきたいのは、第一に天皇の居所は、院の意向で決定されるという実態、第二に「内裏」は「幼主」には広すぎるため、内裏が存在していても里内裏を造営すべきとの考えがみられる点、第三に「殿上諸陣常以無<sub>レ</sub>人」が示す通り、天皇の周囲に本来参仕すべき人々が少ない、もしくはないことが常態化している実態があった、という事実である。

つまり、院政が本格化するのに伴い、公卿・殿上人をはじめとする貴族官人らの多くが、院御所へ集まるため、天皇の周囲は参仕する人が減少傾向を辿っていること示すとともに、摂関期よりもさらに低年齢傾向にある幼主を保護する天皇家の家長としての院の存在が強調されているのだと理解できよう。殊に興味深いのは、家長たる院が、幼主保護を理由に、「常以無<sub>レ</sub>人」く「甚廣博」な内裏ではなく、里内裏を造営させ、常態化しようとしている実態

である。

さらに後掲の通り、移徙の実施回数増加、要因の多様化、そして遷御先の皇居として院御所が選定されるケースが増加するという三点も注目される。

移徙増加の要因としては、第一に内裏と里内裏との機能分化により、即位をはじめとする大規模な宮廷儀式挙行のために内裏へ移動する必要がある点があげられるが、その他の理由にも留意したい。

例えば、天永二年（一一一一）二月二三日、「是日者御所近日有怪異。仍還御内裏」したと言い、怪異出現のために里内裏大炊御門から内裏へ鳥羽天皇の行幸が行われた。この時、「内侍所左中將師時、藏人左少將忠宗、御電神治部卿、右少弁実光」とみえ、電神も渡っているのです、この行幸は移徙だといえる。<sup>(26)</sup>

そして四月二七日には、「今夕從内裏可遷御内大臣土御門亭也。是明春依可被造一条院、為違方忌有御臨幸也。明年從清涼殿、当大將軍并金神方之由所勸申也」<sup>(27)</sup>とある。つまり、内裏が現存しているにもかかわらず、里内裏一条院完成後にはそこへの遷御が予定されているのだが、一条院が方忌となるため、この日まずは内裏から内大臣土御門亭への移徙が実施された。

さらに九月一五日には、「来廿日俄可有行幸賀陽院東対。件事早々可奉行者本支度十月一日入御内裏、同十五日可遷御賀陽院也」<sup>(28)</sup>との院命によって急遽、高陽院へ移徙したのである。

以上のように、院政期には「怪異」や方忌を理由とする頻繁な移徙が、院の命令によって実行される事例が増加する。そして天皇に関する禁忌が、更なる強まりを見せている。

かかる行為の背景にも、院政期天皇の一層の低年齢化と、幼主ゆえ様々な禁忌に束縛される天皇を庇護するために、的確な判断を下す家長としての上皇の立場を際立たせる意図がみられる点に留意しておきたい。

さて、当該期の移徙事例分析の結果、①儀式六〇件、②皇居焼亡関連二六件、③方違え（陰陽道的禁忌）一七件、④新造・修造一四件、⑤非常事態一二件（戦乱・強訴・地震）、⑥怪異八件、⑦祇園御輿二件、⑧不明一九件となった。

如上より、院政期における天皇の移徙要因は多様化するが、大別すると次の二つの理由に基づいて実行されたとみなせるであろう。

ひとつは物理的に現皇居での居住継続が不可能、不都合となる事由が発生した場合。すなわち、皇居の焼亡、戦乱・地震などの非常事態の発生、さらには内裏における儀式挙行のためという要因である。もうひとつは心理的要因による居住継続困難な状況が発生した場合。すなわち陰陽道的禁忌（「犯土」）や怪異の出現、祇園御輿除けなどである。

いずれにせよ天皇の移徙の特徴としては、現皇居での居住継続が不可能、不都合な状況が発生した際に実行される場合が多いという点を確認しておきたい。

ただし、この分類には入らない④新造・修造による移徙に関しては、第四章でふれることとする。

さて、院政期における天皇移徙の特徴をうかがう上で、留意したい事例がもうひとつある。前掲史料の通り、天永二年鳥羽天皇は高陽院を里内裏としていたが、翌年五月一三日亥刻、皇居付近からの出火で「火炎盛飛燼連天、数十字舎屋一時為「煨燼」」<sup>29</sup>った。そこで院御所六条殿を皇居とするよう院命があり、天皇は内侍所をとまって直ちに同殿へ渡御した。

六条殿において、院と天皇は「御対面」したが、摂政忠実は密かに「院暫与内御同所事如何。但無先例也。奉<sub>レ</sub>為院不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>憚。依<sub>レ</sub>院御気色所<sub>レ</sub>問也」と疑問を呈し、中御門宗忠も「主上有<sub>レ</sub>行幸院御所、経<sub>二</sub>両三宿<sub>一</sub>是常事也。但已成<sub>二</sub>主上御所<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>安置内侍所之後、与<sub>二</sub>法皇同宿御事<sub>一</sub>已無<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>者、頗不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>甘心<sub>一</sub>由、愚心所<sub>二</sub>思

給<sub>レ</sub>也」と返答している。その結果、「殿下仰云、我所<sub>レ</sub>思叶<sub>ニ</sub>汝所<sub>レ</sub>案。奏<sub>ニ</sub>件旨<sub>ニ</sub>之處、上皇俄遷<sub>ニ</sub>御頭弁実行朝臣宅<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>」<sup>(32)</sup>したという。  
六条局丸、大式頭季卿之家也

嵯峨朝以降の天皇は、上皇と皇居で同宿しない不文律が存在するが、右の忠実と宗忠の見解によると、院御所へ行幸して数日間同宿する場合は問題ないが、院御所へ内侍所が安置された以上、そこは皇居と認識されるため、皇居での同宿は「不<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>甘心<sub>ニ</sub>」と判断されたのだと理解できる。つまり、天皇の院御所への移徙は、院の他所への遷御を生み出すこととなり、移徙の連鎖が生まれる状況を確認しておきたい。

以上、天皇の移徙の特徴をまとめると、以下になるだろう。

天徳の内裏焼亡を契機としてはじまった移徙は、平安中期には内裏焼亡関連によるものが大部分を占めた。そして摂関の邸宅であつた建物を里内裏とする場合が多く、新造皇居への移徙に先立ち、摂関の儲けによる賜禄や饗宴が大々的に行われていた点が特徴的である。

ところが平安後期、白河院政以降になると、移徙の実施回数が増加するとともに、移徙が行われる理由も多様化した。最も多いのは儀式挙行のための移徙である。これは内裏現存時でも里内裏を皇居とするのが常態化したことと関係している。ただし、里内裏を常態化させていたのは院の意向であり、新皇居の選定や怪異出現による移徙の決定など、天皇の居所が常に院によって決定されていた実態が明らかになった。また、旧宅での盛大な饗宴や賜禄はみえなくなり、全体的に天皇と内侍所や電神の遷御を中心とする簡素な儀式になる傾向がうかがえる。<sup>(33)</sup>

このように天皇の移徙は、概ね物理的（儀式挙行、内裏焼亡、非常事態<sub>ニ</sub>強訴・戦乱からの避難）、ないしは心理的（陰陽道的理由<sub>ニ</sub>方違え、怪異の出現、祇園御興避け等）要因が発生したために、現皇居の使用継続が困難になった場合に実施されたといえるが、平安後期になると、院の判断による移徙や、新造という人為的な契機による移徙が行われ始める点にも留意したい。

### 第三章 上皇の移徙にみる特徴

平安前・中期の天皇は、在位中もしくは讓位後間もなく夭折した例が多く、上皇としての在位期間は短い。なかには長命の上皇もいるが、嵯峨上皇は冷泉院と嵯峨院、淳和上皇は淳和院、宇多上皇は仁和寺と亭子院、円融上皇は円融寺というように、特定の御所に比較的長期間居住する傾向が強い。

しかし白河院以降、上皇の在位期間が長期化するとともに、実に頻繁な移徙が行われた。

井上満郎氏は、院政期の上皇が複数の院御所を持ち、しばしば移動したことについて、「自立した一つの政権の執政者の居所、政権の拠点がたえず移動するというのは、異様である」として、「院御所の移動の頻繁さは、やはり院政という一つの政権の自立性の低さを示すものであろう。しかもその調達方法は不安定な借用という方式によっており、政権の拠点を置くにはふさわしくない。（中略）院政の政治機構が未だこの段階では未発達であったことを示すものといえる。つまり上皇権力の弱さの証明ともいえるのである。院御所がたえず動くということとは、太政官機構が権力執行機関として歴然と存在していたために、とくに政治の推移と関係するものではなかったということにもなる<sup>34</sup>」と、院権力の確立過程と御所の存在形態との関連を興味深く論じられている。

しかし、頻繁に移徙が行われた歴史的要因は明確になったとはいえない。本章では、院政期上皇の移徙事例を古記録から博搜して、現住御所と遷御先の御所、移徙の理由などを整理・分類した一覧（表2「上皇移徙一覧」）を作成して検討を進める。

まず事由に注目すると、①新造・修造五六件、②政務関連五件、③焼亡・非常事態（火災・戦乱・地震）五件、④怪異四件、⑤天皇移徙四件、⑥方違え（陰陽道的禁忌）一件、⑦その他（御所狭小等）二件、⑧不明一五件となり、天皇と同様、御所焼亡などの非常事態や怪異の出現・方違えなど、現御所での居住継続が困難と判断される明

【表2】上皇移徙一覧表

注：月の○付きは間月

No	上皇	元号	西暦	月	日	移徙前の居所	遷御先の居所	移徙の理由	分類	新造・修造御所の造営者・所有者
1	白河	寛治元	1087	2	5	三条殿	鳥羽殿	新造	新造	讃岐守泰仲
2	白河	寛治元	1087	4	7	鳥羽殿	六条殿	—	—	近江守藤原敦家(宗)第
3	白河	寛治元	1087	8	28	六条殿	大炊御門第	—	—	摂政藤原師実第
4	白河	寛治2	1088	3	5	—	鳥羽殿新御所(北殿)	新造	新造	
5	白河	寛治2	1088	11	14	—	六条院東殿	—	—	
6	白河	寛治3	1089	7	20	—	六条院東殿	—	—	
7	白河	寛治3	1089	11	28	—	鳥羽殿	—	—	
8	白河	寛治5	1091	5	12	大炊御門第	土御門第	怪異	怪異	左大臣源俊房第
9	白河	寛治5	1091	8	8	土御門第	六条院	修造(修造之後、初渡御也)	修造	
10	白河	寛治6	1092	8	11		鳥羽殿	—	—	
11	白河	嘉保2	1095	6	26	六条殿	閑院	新造	新造	播磨守顯季
12	白河	嘉保2	1095	10	28	閑院	高松第(三条坊門西洞院)	天皇移徙	天皇	播磨守顯季朝臣第
13	白河	承徳元	1097	12	23	八条宅(藤原顯季宅)	六角東洞院第	新造	新造	備前守源国明第
14	白河	承徳2	1098	7	9	六角東洞院第	六角坊門堀河宅	—	—	安芸守経忠朝臣第
15	白河	承徳2	1098	10	26	六条坊門堀河宅	鳥羽殿北殿	新造	新造	丹波守為章
16	白河	康和4	1102	1	11	鳥羽殿	高松殿	新造	新造	播磨守藤原顯季
17	白河	長治元	1104	7	11	高松殿	土御門第	高松殿作事	修造	内大臣源雅実第
18	白河	長治元	1104	12	27	土御門第	大炊殿	新造	新造	伊予守源国明
19	白河	長治2	1105	1	11	大炊殿	土御門第	遷御	新造	内大臣源雅実第

20	白河	嘉承 2	1107	1	15	土御門第	大炊御門第	先年造営。大將軍南忌により去年渡らず	陰陽	伊予守源国明
21	白河	嘉承 2	1107	10	9	鳥羽殿	中御門宅	—	—	左大弁源重資第
22	白河	嘉承 2	1107	11	19	綾小路第	中御門宅	皇居近隣(即位の間)	政務	左大弁源重資第
23	白河	嘉承 2	1107	⑩	1	中御門宅	綾小路第	御所狭小のため	その他	中納言源国信第
24	白河	天仁元	1108	2	25	(白河)	六条殿(中院)	皇居近隣	政務	修理大夫第
25	白河	天仁元	1108	11	19	六条殿	大炊御門万里小路第	還御	政務	播磨守藤原長実第
26	白河	天永 3	1112	3	21	六条殿	大宮三条	還御	政務	伊予守藤原基隆
27	白河	天永 3	1112	5	13	六条殿	六条鳥丸第	天皇移徙	天皇	頭弁藤原実行第・大式頭季第
28	白河	天永 3	1112	9	8	六条鳥丸第	大炊御門万里小路第	怪異	怪異	播磨守藤原長実第
29	白河	永久元	1113	③	9	大炊御門第	東洞院大炊御門第	怪異	怪異	藤原為房第
30	白河	永久 2	1114	8	17	大炊御門万里小路第	七条坊門町尻第	皇居近隣	政務	土佐守能仲第(殷暦：讃岐守)
31	白河	永久 3	1115	11	2	—	白河阿弥陀堂御所(泉殿)	新造	新造	平正盛
32	白河	永久 3	1115	11	6	白河阿弥陀堂御所(泉殿)	大炊殿	還御	新造	
33	白河	永久 4	1116	8	16	大炊殿(殷暦)大炊御門第	同東廂所	天皇移徙	天皇	
34	白河	永久 5	1116	8	16	同東廂所	土御門御所(右大臣雅実) <sup>カ</sup>	天皇移徙	天皇	
35	白河	元永元	1118	7	10	土御門御所(右大臣雅実) <sup>カ</sup>	白河北新小御所	新造	新造	越前公比宮之神主
36	鳥羽	保安 4	1123	6	10	白河北殿	二条殿(二条東洞院殿)	新造	新造	備中守長親
37	白河	大治元	1126	2	2	(三条西殿カ)	三条鳥丸殿(三条東殿)	新造	新造	播磨守藤原家保

38	白河	大治元	1126	8	10	(三条西殿カ)	室門西殿(奥殿)	新造	権中納言顯隆
39	白河	大治元	1126	12	27	三条殿	春日殿(大炊御門万里小路殿)	新造	伊予守基隆
40	白河	大治3	1128	6	27	(三条殿カ)	八条大宮御所	新造	権右中弁頭頼
41	白河	大治4	1129	1	3		白河北殿	新造	法橋信縁
42	鳥羽	大治4	1129	9	16	三条京極亭(女院御所)	大炊御門万里小路御所	非移徙儀	その他
43	鳥羽	大治5	1130	10	29	白河殿	仁和寺御堂御所(法金剛院)	新造	新造
44	鳥羽	大治5	1130	11	12	仁和寺御堂御所(法金河御所還御)	三条殿(さらに2日に白河御所還御)	還御	新造
45	鳥羽	大治5	1130	12	26	白河殿	三条西殿	新造	越後守清隆
46	鳥羽	天承元	1131	3	19		鳥羽殿	御領となすのち初めて還御	新所
47	鳥羽	長承元	1132	10	3	白河殿カ	新御堂御所(宝莊藏院)	新造	播磨守宗成
48	鳥羽	長承元	1132	12	26	—	二条亭(二条万里小路)	新造	中納言長実
49	鳥羽	長承2	1133	6	28	—	土御門第	修造	諸国支配
50	鳥羽	長承2	1133	12	26	白河押小路殿	小六条殿	修造	讃岐守経隆
51	鳥羽	長承3	1134	12	19	白河殿	三条鳥丸	新造	丹波守為忠
52	鳥羽	長承3	1134	12	22	三条鳥丸	白河北段東新造御所	新造	権中納言顕頼
53	鳥羽	保延元	1135	3	27	仁和寺北斗堂	法金剛院東新造御所	新造	周防守憲方
54	鳥羽	保延3	1137	7	28	—	八条殿	—	—
55	鳥羽	保延4	1138	8	11	—	鳥羽東新御堂御所	—	—



56	鳥羽	保延 6	1140	10	27	(三条烏丸殿)	正親町殿	新造		新造	入道大相国(藤原忠実)・高陽院御所
57	鳥羽	永治元	1141	3	3	(白河北殿々) 由小路	新御堂御所(白河勸解 由小路)	新造		新造	
58	鳥羽	康治 2	1143	4	3	—	押小路殿	新造		新造	丹後守藤原俊盛
59	後白河	保元 3	1158	8	17	内裏	高松殿	還御		新造	
60	後白河	平治元	1159	8	16	高松殿	三条烏丸々	焼亡		焼亡	
61	後白河	平治元	1159	12	9	三条烏丸殿	一本御書所	焼亡		焼亡	上西門院統子内親王第
62	後白河	応保元	1161	4	13	—	法住寺殿	新造		新造	家明
63	後白河	仁安元	1166	11	2	—	鳥羽北殿	新造		新造	遠江守・従三位俊盛 (藏岐・周防)
64	後白河	仁安元	1166	11	7	鳥羽北殿	七条殿(法住寺殿)	還御		新造	
65	後白河	仁安 2	1167	1	19	—	法住寺南殿	修造		修造	周防守藤原季盛
66	後白河	仁安 2	1167	4	4	—	七条殿(法住寺殿)	還御		新造	
67	後白河	仁安 2	1167	7	20	—	山科殿	新造		新造	遠江守平業忠
68	後白河	仁安 2	1167	8	10	—	伏見殿	新造		新造	成親卿
69	後白河	嘉應 2	1170	3	20	—	鳥羽北殿	新造		新造	越後守平信業
70	後白河	承安 2	1172	7	21	—	三条殿(三条室町)	新造		新造	成親卿
71	後白河	承安 2	1172	8	16	—	北殿小御所	新造		新造	
72	後白河	承安 2	1172	10	19	—	鳥羽殿(南殿)	修造		修造	尾張守信業男長門守業忠
73	後白河	承安 2	1172	10	20	鳥羽殿(南殿)		還御		修造	
74	後白河	承安 3	1173	10	5	法住寺南殿	新御堂御所(最勝光院)	新造(建春門院御堂・21 落慶供養)		新造	

75	後白河	承安 4	1174	8	10	—	七条殿	修造	修造	僧西光(藤原師光)
76	後白河	承安 4	1174	11	27	—	法住寺南殿	修造	修造	
77	後白河	安元元	1175	7	11	—	最勝光院南御所	新造	新造	
78	後白河	安元元	1175	12	13	—	山科殿	新造	新造	権人納言成親
79	後白河	安元元	1175	12	15	山科殿	法住寺殿?	遷御	新造	
80	後白河	治承 3	1179	6	3		山科御所	—	—	政建春門院領
81	後白河	治承 3	1179	6	6	山科御所	法住寺殿	遷御	—	
82	後白河	養和元	1181	12	13	—	新造御所(法住寺殿乾)	新造	新造	
83	後白河	寿永 2	1183			—		非常事態(平氏西走、義仲入京等)	非常	さまざまな所に潜行
84	後白河	元暦元	1184	4	16	八条院	金剛勝院御所(押小路殿)	修造	修造	
85	後白河	文治 3	1187	2	2	六条殿	鳥羽南殿	修造	修造	諸国所課
86	後白河	文治 3	1187	2	16	鳥羽南殿	鳥羽北殿		—	
87	後白河	文治 3	1187	4	9	鳥羽南殿	大炊御門殿	怪異	怪異	
88	後白河	文治 4	1188	6	16	—	五条第	焼亡(4.13常御所六条殿焼亡)	焼亡	大納言藤原兼雅第
89	後白河	文治 4	1188	12	19	—	六条殿	新造・遷御	新造	諸国所課

表は拙著(註5)492～496頁より転載。

確な事由が確認されるものの、天皇とは異なる要因もある。

まず②政務関連とは、叙位除目などの人事関連の政務や公卿会議が行われる時、もしくは即位や強訴の際に、「依<sub>(96)</sub>「皇居近隣」」との理由によって遷御した例などを指している。使者を介して、上皇が政務や儀式の執行に関与したり、緊急事態に直接的な対応が行えるように皇居近隣の院御所へ移ったのである。

次いで、⑤天皇移徙とは前章で述べた通り、天皇が上皇の現住御所に移徙した場合、皇居で天皇と同居しないとの不文律により、上皇が他所への遷御を必要とする事態を示している。

さて、最も注目すべきは、①御所の新造・修造を事由とする例が六割（八九件中五六件）に上るという事実であろう。

例えば、白河院は嘉保二年（一〇九五）六月二十六日、「自<sub>レ</sub>六条殿<sub>ニ</sub>初遷<sub>ニ</sub>御新造閑院<sub>ニ</sub>。播磨守（藤原）顕季朝臣自<sub>レ</sub>去年<sub>ニ</sub>造<sub>ニ</sub>宮之<sub>ニ</sub>（中略）（賀茂）道言朝臣勤<sub>ニ</sub>反閑<sub>ニ</sub>。有<sub>ニ</sub>黄牛・水火童女等事<sub>ニ</sub>、又有<sub>ニ</sub>所所饗饌・攤<sub>ニ</sub>。又奉<sub>レ</sub>渡<sub>ニ</sub>御竈神<sub>ニ</sub>。つまり院は近臣播磨守藤原顕季が新造した閑院に旧御所六条殿から「黄牛・水火童女等<sub>（36）</sub>」をとめない移動している。

右記の通り、院政期の上皇移徙の多くは、造営・修造に起因しており、必ずしも現御所で居住存続が物理的あるいは心理的に不可能、不都合な状況が発生したために家移りを行った訳ではない。

さらに、「一夜之儀<sub>（37）</sub>」とみえるように、本来三日間におよぶ移徙作法を一日に略してまでも実行するようになる。元永元年（一一一八）七月一〇日、白河院が突如、白河北小御所に遷御した例では、院司藤原宗忠が記すところによると、「今夜之事、俄依<sub>レ</sub>承、不知<sub>ニ</sub>子細<sub>ニ</sub>如何<sub>ニ</sub>」といい、「今夜無<sub>ニ</sub>水火童<sub>ニ</sub>。只黄牛五菓反閑也。又只一夜許可<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>饗<sub>ニ</sub>」という状況であった。この時、新居となった御所は「本御所之北大路北辺」に、「越前氣比宮之神主」の成功で造進されたものである<sub>（38）</sub>。

また、後白河院が、藤原成親が造営した三条御所に移った際も、「一夜儀」であったといい、その夜成親は勸賞として、「從二位、丹波重任、越後重任、遷任国司又追可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>ニ</sub>之云々<sub>（39）</sub>」とみえ、破格の「五カ事之賞」を受けている。さらに、その二日後には高倉天皇が「非<sub>ニ</sub>御方違<sub>ニ</sub>、非<sub>ニ</sub>朝覲<sub>ニ</sub>」ず「無<sub>ニ</sub>指事<sub>ニ</sub>」く、この新御所に僅か一日行幸<sub>（40）</sub>している。

以上、上皇に関しては、災難を避ける等の目的を達成するために移徙を行うのではなく、新しく御所が完成した（「新造」）場合や旧御所の改修が完了した（「修造」）際に移徙が行われる事例が突出して多いという特徴が指摘できる。つまり、必ずしも現御所での居住継続が困難と判断される明確な事由（物理的・心理的等の事由）が生じて移徙が実行される訳ではないのである。そして、しばしば実行された「一夜之儀」からは、移徙すること自体が目的化している状況が看取されるのである。

かような移徙を実行するメリットはどこにあるのだろうか。最後に、造営関連の移徙が最多であるという実態を踏まえ、院御所が次々と造営される背景について検討を加えたい。

#### 第四章 院政期の移徙と御所造営の背景

上皇が怪異や御所の焼亡、もしくは公卿会議など政務と関連して「皇居近々」の廷臣邸へ移徙した場合、その新旧いずれの御所提供者（家主）やその関係者にも勅賞が行われることはない。

しかし、移徙事由として最も大きな割合を占める新造・修造御所へ遷御した際には、院御所造営を請け負った人物が、その当日（または翌日）に「重任宣旨」を賜るなどの勅賞が実施される例が多く見られる。いくつか事例をあげておきたい。

① 嘉保二年（一〇九五）六月二十六日、当時六条院に居住していた白河院と郁芳門院は、六条殿から、「新造閑院」へ初めて遷御した。この御所は、「播磨守顕季朝臣自去<sub>レ</sub>年<sub>二</sub>造<sub>レ</sub>営<sub>之</sub>」<sup>①</sup>とあり、三日目には顕季に「重任事」が仰せられている（No.11）。つまり、これによって新造の院御所閑院の造営を請け負った顕季は、播磨守への再任が約束され、受領の任期がもう一期延長されることになるのである。（Noは表中の番号、以下同じ）。

② 保安四年（一二二三）六月一〇日、当時白河殿に居住していた新院（鳥羽院）と中宮（藤原璋子）が、初めて

「新造二条殿」に遷御した。その御所は、「法皇（白河院）去年仰<sub>レ</sub>備中守（藤原）長親被<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>營之<sub>一</sub>」<sup>(42)</sup>れたという。そして遷御当日、長親は「重任宣旨」を蒙っている（No.36）。

③ 大治元年（一二二六）二月二十七日、白河院が「新院（鳥羽院）・女院（待賢門院）・二宮（通仁）・姫宮（禧子）」をともない、三条殿から「新造大炊御門万里小路殿」に渡御した際、造作賞として「（藤原）基隆朝臣男備中守忠隆朝臣」に「重任宣旨」<sup>(43)</sup>が仰せられた（No.39）。

④ 長承三年（一二三四）二月、鳥羽院は僅か一〇日間に二度の移徙を行っている。まず、一九日には「自<sub>二</sub>白河殿<sub>一</sub>初渡<sub>二</sub>御三条鳥丸殿<sub>一</sub>（中略）丹後守為忠朝臣募<sub>二</sub>遷任功造<sub>二</sub>營之<sub>一</sub>（中略）。有<sub>二</sub>反閑黄牛事<sub>一</sub>、所々饗饌如<sub>レ</sub>常」とみえ、翌日には「仰<sub>二</sub>勸賞<sub>一</sub>。正四位下藤原為忠造作賞」（No.51）とある。次いで二八日には、「権中納言頭頼卿」が「募<sub>二</sub>加賀遷任功<sub>一</sub>、造<sub>二</sub>進御堂御所<sub>一</sub>」したという「白河北殿東新造御所」に「初遷御」した<sup>(44)</sup>。いずれも御所を造営した受領に勸賞が与えられている。

⑤ 仁安二年（一二六七）正月一九日、後白河院は鳥羽殿から法住寺殿に初めて遷御したが、藤原季盛は「周防守造作賞」として「従五位上」と「蒙<sub>二</sub>重任宣旨<sub>一</sub>」<sup>(45)</sup>（No.65）つたとみえる。

以上は各上皇が行った移徙の中で些少の例をあげたにすぎないが、いずれも共通しているのは、成功で院御所が新造されて間もなく上皇がそこへ遷御し、造営を請け負った受領—もしくは知行国主など家族を含む—に対して、「重任」もしくは「遷任」宣旨を賜りこれを許可するなど、なんらかの勸賞—場合によっては加階が行われる。その相違については拙稿参照<sup>(46)</sup>—が行われている点である。

周知のとおり、受領とは任国に赴任した国司の最高責任者であり、院政期には院の近臣によって、その多くが占められていた。

受領は定められた税を中央政府に納入すると、残りを私物にすることが可能であったため、実入りのよい大国の

受領は私服を肥やすチャンスに恵まれた魅力的なポストであった。そして、律令制的な財政制度が崩壊した平安後期には、このような受領の私富を利用した成功が国家財政の重要な柱となっていたのである。<sup>(47)</sup>

上皇は受領成功という方法を用いて、諸国の富を京に回収して、院御所や御願寺などの大規模造営の財源を確保した。近臣を受領という重要ポストに採用して院政の基盤強化を図ろうとする院の思惑によって、上皇に関わる建物の造営を請け負った場合には、勅賞が特に優遇されていたため、彼等が院御所の造営を競って請け負ったと考えられる。

一方、受領等にとつては、経済的負担は莫大であっても、重任や遷任が許可されることによってポストの獲得や維持が図られるため、次々に造営し、任期終了間際にさらなる造営請け負いを図って再任を目指したり、その権利を子弟に譲与して受領ポストの確保に腐心した。

このようにポスト獲得を目指す受領による積極的な造営請け負いは、結果として、院御所の建設ラッシュを招き、いわば供給高の状況をもたらした。さらに、その建造物を院御所と確定するために、院は移徙という儀式を行い、時には「一夜之儀」という略儀を行ってまで、勅賞を実施して受領の期待に応えたのである。これが、当該期における造営を契機とする院の頻繁な移徙の背景であったと推察する。

なお、皇居の造営は、基本的には国苑（諸国所課）と呼ばれる方式で実施された。つまり、院御所とは異なり、皇居造営に関しては、若干の例外を除き、成功は採用されなかった。国苑とは、内裏・里内裏の殿舎や大内裏の各所、大垣などの造営が、国ごとに割り当てられる方式である。そして国衙にあるべき正税等を「不立用」に造営した場合に勅賞の対象となったが、位が上がる（加階）のみであり、重任や遷任が許可されることはなかった。<sup>(48)</sup>従って、受領にとつては、成功で院御所などの造営を請け負う方が、国苑よりも負担は大きくとも、受領の再任という大きな褒賞が期待できたのである。

以上のような院政期の国家財政制度、大規模造営のシステム、さらには受領の人事制度との相關關係に注目すると、受領成功を核として、院御所の造営↓移徙↓勸賞の実施（受領の再任）↓受領成功による院御所の造営…、という循環構造が存在していたと推知されるのである。

## おわりに

平安時代における天皇の移徙は、天徳の内裏焼亡を契機として始まったように、皇居焼失という物理的に現皇居での居住存続が不可能な状況が発生した際に、それを避けるために実施するのが本来の目的であった。

内裏焼亡時には、後院へ移徙する場合もあるが、多くは外戚家である摂関の邸宅が遷御先に選ばれ、里内裏となる。しかし、あくまでも内裏こそが天皇の居所としてふさわしいとの「常識」が存した平安中期には、内裏が再建されるとすぐに還御するのが常であった。

新造内裏への還御に先立ち、天皇は本来の家主とその家族や家司に対して勸賞叙位を行うとともに、家主たる摂関の儲けによって盛大な饗宴と、移徙に供奉する公卿・殿上人以下、舍人や下女に至るまで多く人々への賜祿が実施された。つまり、王権を構成する摂関たる外戚家が、他の貴族と隔絶した立場にあることを明示する場として、移徙が利用されていた側面が浮かび上がるのである。

ところが院政期になると、天皇家の家長たる院が、幼主保護を理由に、「常以無<sub>レ</sub>人」く「甚廣博」な内裏ではなく、里内裏を造営させ、常態化しようとしている様子や、怪異や陰陽道的禁忌などの心理的な要因によって居住継続が困難と判断される事態が生じた際にも、院命によって移徙が実行される例が多見されるようになった。

このように天皇の居所は自身の意志とは無關係に、治天の君たる院の一存で決定されていた事実に留意したい。つまり、天皇の移徙とは、院（治天の君）が自身の存在意義や権力、天皇との關係を貴族社会や都の住民に知らし



める手段の一つとして利用されていたと理解することもできるのではないだろうか。

ただし、天皇の移徙は、総じて現皇居での居住継続が不可能、不都合な事由が発生したことによる必要に迫られた状況下で実施されると総括されよう。

これに対して上皇の移徙は、天皇の場合と同様に、御所の焼亡や怪異・方違えなど、現御所での居住存続が物理的・心理的に困難な状況が発生した時にも実行しているが、差し迫った移動の必要性がないにもかかわらず、院御所の「新造」もしくは「修造」を理由として遷御するのが最も多いという特徴がみられた。

院御所が次々と受領の成功によって造営され、院が新造御所へ移徙を行う背景には、かかる受領を介して地方の富を都へ回収する当該期の財政構造と、成功による受領人事という利権を巡る構造的な問題が窺知される。つまり、上皇が移徙を実行することによって、受領が建設を請け負った新造御所は院御所として確定され、受領は受賞できた。逆説的にいえば、院の移徙の多くは、建造物を院御所と認め、勸賞を実施するために行われていたのである。そして、院の移徙が多ければ多いほど、受領による院御所の造進という院への奉仕が盛んだという実状を示すこととなり、移徙は院の権力と経済力を誇示する機会であったということができよう。したがって院の頻繁な移動は、院権力や王権の未熟さや不安定さ起因にした行為とは思われる。

従来の研究において、平安中・後期の行幸は、主として都市論や王権論の立場から論ぜられ、「動かない王」「見えない王」の可視化、行列・見物のあり方、「見る」「見られる」「見せる」などの視角からの分析や意義づけが中心であった。

しかし、本稿は夜陰にまぎれて行う「移徙」を検討対象に据えることにより、王権の移動に関する新たな分析視角を提示した。特に、内裏焼亡などの災害からの避難という必要に迫られた移徙以外の要因が増加する平安後期における王権の移動は、幼帝と家長たる院との関係性、御所造営をめぐる利権、勸賞（反問を担当した陰陽師や造営



を請け負った受領への叙任」という人事の問題を視野に入れて考察していく必要性を強調しておきたい。

さて、平安遷都以来、長らく京都から都が動くことはなかった。僅かに平安末期、福原遷都が試みられたものの失敗に終わる。それは、政治、経済、宗教、文化の諸方面において、京都を中心とするシステムが完成し、さまざまな利害関係が複雑に構成されており、それを変更するのは、諸方面からの抵抗があまりに強すぎたためと考えられる。

しかしその京の都の中で、天皇と上皇という権力体が移徙により、頻繁に移動したのが平安時代の中・後期の姿であった。移徙の直接的理由は、本稿で述べたとおりであるが、人臣の強力な奉仕と、莫大な経済力を要する遷都という事業を放棄した時代における、王権の権力の行使の仕方、見せ方、維持の方法という観点から、王権とその移動の問題を今後さらに追及していきたいと思う。

〔付記〕 本稿は、鷹陵史学会第二三回年次研究大会の公開シンポジウムにおいて報告した内容を書き下ろしたものである。貴重なご報告を拝聴させていただいた山田邦和、渡辺信一郎両氏、司会の貝英幸氏をはじめ、質問を頂戴した各氏に、心から謝意を表したい。なお、本報告は、旧稿（佐古愛己『平安貴族社会の秩序と昇進』第八章「摂関・院政期における天皇・上皇の移徙」、思文閣出版、二〇一二年）に基づき行ったものであり、データや文章の一部は旧稿より引用した。

## 註

- （１） 日本古代の行幸に関しては、早川庄八「律令国家・王朝国家における天皇」（『日本の社会史３ 権威と支配』岩波書店、一九八七年）、仁藤敦史①「都城の成立と行幸『動く王』と『動かない王』（『古代王権と都城』、吉川弘文館、一九九八年、初出は一九九七年）、同②「古代の行幸と離宮」（『条里制・古代都市研究』一九、二〇〇三年）、鈴木景二「日本古代の行幸」（『ヒストリア』

一二五、一九九〇年）、榎村寛之「野行幸の成立―古代の王権義礼としての狩獵の変質―」（『ヒストリア』一四一、一九九三年）、仁藤智子「都市王権」の成立と展開」（『歴史学研究』七六八、二〇〇二年）などの研究を参照。

(2) 仁藤敦史氏注(1)所引論文②参照。

(3) 仁藤敦史氏注(1)所引論文①参照。

(4) 朝観行幸に関しては、鈴木氏注(1)所引論文、栗林茂「平安期における三后儀礼について饗宴・大饗儀礼と朝観行幸」（『延喜式研究』一一、一九九六年）、服藤早苗「王権の父母子秩序の成立―朝観・朝拝を中心に―」（『二〇世紀研究会編』『中世成立期の政治文化』東京堂出版、一九九九年）、長谷部寿彦「九世紀の天皇と正月朝観行幸の成立」（『国史学研究』三一、二〇〇八年）などを参照。また、神社行幸に関しては、岡田莊司「神社行幸の成立」（『平安時代の国家と祭儀』続群書類従完成会、一九九四年、初出は一九九一年）、大村拓生「中世前期の行幸神社行幸を中心として」（『中世京都首都論』吉川弘文館、二〇〇六年、初出は一九九四年）、上島享①「中世王権の創出と院政」（日本の歴史『古代天皇制を考える』講談社、二〇〇一年）、同②「中世宗教支配秩序の形成」（『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会、二〇一〇年、初出は二〇〇一年）などがある。

(5) 拙著『平安貴族社会の秩序と昇進』①第三章「官行事」における勳賞の特質―神社行幸を素材として―、②第四章「非『官行事』における勳賞の特質―朝観行

幸を素材として―」（思文閣出版、二〇一二年、①の初出は二〇〇二年）。

(6) 野田有紀子「日本古代の鹵簿と儀式」（『史学雑誌』一〇七―八、一九九八年）四六、五三頁。

(7) 野田有紀子「行列空間における見物」（『日本歴史』六六〇、二〇〇三年）一三頁。

(8) 仁藤智子氏注(1)所引論文。

(9) 『御堂関白記』寛仁二年四月二日条、『葉黄記』寛元四年一〇月二四日条など。行幸見物に関しては、藤原重雄「行列図について―鹵簿図・行列指図・絵巻―」（『古文書研究』五三、二〇〇一年）、野田氏注(7)所引論文を参照。

(10) 『小右記』寛仁元年一月二六日条。

(11) 『中右記』永久二年一月一四・二三日条。

(12) 隴谷寿「賀茂祭の棧敷」（『角田文衛博士古稀記念』古代学叢論『角田文衛先生古稀記念事業会、一九八三年』などを参照。

(13) 小坂真二「陰陽道の反問について」（村山修一編『陰陽道叢書 特論』名著出版、一九九三年）。

(14) 『日本紀略』天徳四年九月二三日、一月四日条。なお、山下克明氏によると、天皇に対して陰陽師による反問が行われた初見はこの行幸時であった（山下克明『平安時代の宗教文化と陰陽道』岩田書院、一九九六年）。

(15) 『日本紀略』貞元元年五月一日、七月二六日条。

(16) 『日本紀略』寛弘六年一〇月五・一九日条。

(17) 『御堂関白記』寛弘六年一〇月一九日条。

- (18) 『小右記』 長和四年六月一三日条条。  
 (19) 拙著注(5)第八章「摂関・院政期における天皇・上皇の移徙」所引「天皇移徙一覧表」を参照。  
 (20) 『御堂関白記』 寛弘七年二月二八日条。  
 (21) 『小右記』 長和五年五月二日条。  
 (22) 橋本義彦「里内裏沿革考」(『平安貴族』 平凡社、一九八六年、初出は一九八一年)。  
 (23) 『中右記』 天永三年五月一三日条。  
 (24) 『中右記』 天永三年五月一五日条。  
 (25) 『中右記』 天永三年一〇月一九日条。  
 (26) 『中右記』 天永二年二月二三日条。  
 (27) 『中右記』 天永二年四月二七日条。  
 (28) 『中右記』 天永二年九月一五日条。  
 (29) 注(19)の表参照。  
 (30) 『中右記』 天永二年九月二〇日条。「(皇居土御門第から高陽院東対に遷御) 皇居之事、自<sub>レ</sub>本可<sub>レ</sub>御賀陽院之由、先日所奏達也。幼主御時、忽不<sub>レ</sub>可有<sub>二</sub>大犯土造作<sub>一</sub>歟。近日内裏已全、於<sub>二</sub>有<sub>二</sub>大事時<sub>一</sub>者、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>還入<sub>一</sub>給也。仍強不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>新皇居<sub>一</sub>事也。但於<sub>二</sub>我居所<sub>一</sub>者、只可<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>院御定<sub>一</sub>也」とみえ、院政期には、皇居周辺の作事による「犯土」を避ける禁忌が生じている。  
 (31) 『中右記』 天永三年五月一三日条。  
 (32) 同右。  
 (33) 個々の移徙における供奉の人数や賜祿の具体的な検討は今後を期したい。  
 (34) 井上満郎「院御所について」(御家人制研究会編『御

- 家人制の研究』吉川弘文館、一九八一年) 一一九・一二〇、一四一・一四二頁。  
 (35) 美川圭①「鳥羽殿と院政」(『日本史研究』 四六〇、二〇〇〇年)、同②「鳥羽殿の成立」(上横手雅敬編『中世公武権力の構造と展開』吉川弘文館、二〇〇一年)、同③「中世成立期の京都」(『日本史研究』 四七六、二〇〇二年)、同④「京・白河・鳥羽―院政期の都市―」(元木泰雄編『日本の時代史7 院政の展開と内乱』吉川弘文館、二〇〇三年)。川本重雄「統法住持殿研究」(高橋昌明編『院政期の内裏・大内裏と院御所』文理閣、二〇〇六年)。  
 (36) 『上皇御移徙記』(宮内庁書陵部編『図書寮叢刊仙洞御移部類記下』明治書院、一九九一年) 嘉保二年六月二六日条。  
 (37) 『中右記』 大治五年一〇月二九日条、「玉葉」承安二年七月二一日条などを参照。  
 (38) 『中右記』 元永元年七月一〇日条。  
 (39) 『玉葉』 承安二年八月二一日条。  
 (40) 『玉葉』 承安二年八月二三日条。  
 (41) 『上皇御移徙記』 嘉保二年六月二八日条。  
 (42) 『上皇御移徙記』 保安四年六月一〇日条。  
 (43) 『上皇御移徙記』 大治元年二月二七日条。  
 (44) 『上皇御移徙記』 長承三年二月一九・二〇・二八日条。  
 (45) 『上皇御移徙記』 仁安二年正月一九日条。  
 (46) 拙著注(5)第七章「摂関・院政期における受領成功と

貴族社会」(初出は二〇〇六年)。

- (47) 寺内浩『受領制の研究』(塙書房、二〇〇四年)、上島  
享『日本中世社会の形成と王権』(名古屋大学出版会、  
二〇一〇年)。

- (48) 詳しくは、拙著注(5)第七・八章参照。